

新規捕獲手法等の検討計画について

1. 既存手法の改良、新規手法開発の必要性

麻醉銃を用いた捕殺を繰り返すとニホンジカ個体の警戒心が高まり、麻醉銃を用いた捕獲を行う昼間の目撃頭数は、捕獲を行わない夜間の目撃頭数を大きく下回り、捕獲効率は年々減少してきた。このような現象は装薬銃を用いた捕獲が行われる地域（乱場など）で見られる。今後、目標捕獲数を確保するためには、銃等の既存捕獲手法の捕獲効率を向上させるための検討、警戒心を抱かせない捕獲手法、あるいは夜間にも実施可能な捕獲手法、新規手法について検討を行う。

2. 既存捕獲手法の捕獲効率向上に関する案

2-1. 麻醉銃

麻醉銃は射程距離が短いため（20～50m 程度）、警戒心を抱いたニホンジカに命中させることは難しい。これまで実施してきた流し猟の形式での捕獲では捕獲効率の向上は望めない。ツリーシートの活用など、新しい手法での麻醉銃の活用を試みる。

2-2. くくりわな

本年度実施した試験捕獲では、バネ式のくくりわな（シシキラー（商品名））を使用した。1人あたりの捕獲効率は高く（捕獲効率：0.50）、警戒心の上昇を抑制できれば今後も同程度の捕獲効率が期待できると考えられる。

今後、下記の点について検討を行い、捕獲の継続を検討する。

- 人、他種への安全性と、捕獲効率を考慮した捕獲に適した時期
- 捕獲効率を高めるためのわな設置位置（配置）
- 安全性の高いわなの種類
- 多数のわなの稼働を即時的に確認する方法

3. その他新規手法開発

3-1. ドロップネット

平成19年度新規捕獲手法開発の項目として、ドロップネットの試行を行ったが、捕獲性の良いネット素材がなく、実用化には至っていない。ネット素材の課題が解決すれば、実用化の可能性のあることから、継続して検討を行う。

3-2. 大型囲い柵の検討

本年度誘引試験で実施した装置（ビートパルプ、自動給餌装置）による効果は活用に値すると考えられる。

ビートパルプによる誘引は、物資調達が課題である（北海道での需要が高く入手困難）。本年度は1個での実験を実施したが、今後複数個での誘引試験を実施し、相当数の個体

の誘引の可能性が確認できれば、「大型囲い柵」等の大規模装置による捕獲における活用の可能性を検討する余地があると考えられる。

自動給餌装置による誘引における課題の一つは、ニホンジカ以外の種の誘引につながる点である。誘引試験時にイノシシが採餌していたことが確認されている。イノシシ以外にも採餌の可能性がある種は多数存在するため、実施の可否には十分な検討が必要である。